

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第634号 平成25年10月29日

あふれる言葉

思いはあるのに、それを人に伝える術がないとすれば、それはどれ程もどかしく、辛い事でしょうか。

人と会話が出来ないというのは、人とコミュニケーションを取る為の大きな手段が失われているという事であり、社会生活を送る上でも大きなハンディキャップとなります。そういう大きなハンディキャップを背負いながら、本人の努力と彼を取り巻く人々の支援の力によって、自分の思いを表現する力を獲得した一人の青年がいます。

彼の名は「東田直樹」といいます。彼は、1992年8月千葉県に生まれていますので、現在は21歳になっていますが、重度の自閉症の為に他者とコミュニケーションを取る事が苦手です。

自閉症というのは、発達障害の一つで、先天的な脳の機能障害が原因とされています。一口に発達障害といってもその症状は一様ではなく、東田君の場合は、人と会話する事が出来ないという重度の自閉症といわれています。にもかかわらず彼は、パソコンや文字盤ポインティングを使用する事により、援助無しで自分の意思を表明する等、人とコミュニケーションを取る事が可能といわれています。

「光の中へ」
光の中へ
ただ 光の中へ
僕は入りたい
たとえ そこが
現実の世界でなくても
光が僕を誘う

(以下略)

左の詩は、朝日新聞（7月25日付）に「自閉症の心 あふれる言葉」として掲載された彼の詩です。

私は、この詩を見て東田直樹という存在に興味を持ちました。彼は、既に絵本や詩集など14冊の本を執筆すると共に、東京大学や福岡女学院大学等で講演会を開催したりしています。

右の詩は、彼が13歳の折に上梓した作品集「勇気はおいしいはず」に掲載されている詩の一部ですが、彼の作品に触れていると、その表現の豊かさに驚かされます。

彼は、何処から、どの様にしてその表現力を身に付けたのでしょうか。

ある日、彼の母親が君津市内の「はぐくみ塾（鈴木敏子塾長）」という所を訪れます。その塾は、ハンディキャップのある子ども達の指導に「筆談」という方法を取

勇気はおいしいはず
内容を気にしなければ
どこにでもあるけれど
全員は食べれない

り入れていました。鈴木塾長から「筆談」というコミュニケーションの方法を知った彼女は、息子に鉛筆を握らせ「筆談」の訓練を始めます。そして、母と子の凄まじい迄の忍耐と努力によって、直樹君は、遂に自由に筆談が出来る様になり、自己表現の道具を獲得した彼は、文字通り堰を切ったように心の内を詩や小説で表現する様になります。

母親は、息子との共同作業を通じる中で、今まで分からなかった直樹君の行動の意味、例えば、「目の前で手をひらひらさせる」というのは、この子にとって「光が粒となって見えていて、その粒と遊んでいるのだ」という様な事が理解出来る様になったといえます。

浜松医科大学の杉山登志郎特任教授（児童青年期精神医学）は、発達障害を「発達凸凹」と表現しています。つまり、「発達凸凹」というのは、認知に高い峰と低い谷の両者を持つ子どもや大人をいい、狭義の発達障害とは、発達凸凹に適応障害が加算されたグループの事をいうとしています（同氏著「発達障害の今」から）。

直樹君は、内面に豊かな感性という凸の力を持ちながら、表現力を持たなかった為に自閉症で知能についても低いと思われていました。従って、もしも彼の持つ潜在的な力に誰も気付かなければ、今も福祉的な就労に甘んじていたかも知れません。

「自閉症の僕が飛び跳ねる理由」という本の中で直樹君は、

- 大きな声は何故出るのか？
- いつも同じことを尋ねるのは何故か？
- どうして上手く会話が出来ないのか？

等について、詳細に自分の心の内を分析しています。これを読む限り、彼が自閉症である事が信じられません。

どの様な子どもにも様々な能力が隠されており、高い峰と低い谷があるとすれば、低い谷に対する教育だけでなく高い峰に対する教育、つまり、特異な才能持つ子に対してはその才能を可能な限り伸ばして行く教育が必要なのだと、改めて感じます。

（塾頭：吉田 洋一）